

受 験 番 号

平成 29 年度 推薦入学試験問題

小 論 文

【注意事項】

1. この冊子には問題用紙と答案用紙が挟み込まれています。試験開始の合図があるまで冊子を開いてはいけません。
2. 試験開始後、この冊子、問題用紙、答案用紙の受験番号欄（左上）に受験番号を記入しなさい。
3. 問題用紙には問題が 1～3 ページに記載されています。落丁、乱丁および印刷不鮮明な箇所があれば、手をあげて監督者に知らせなさい。
4. 答案には、必ず鉛筆（黒「HB」「B」）またはシャープペンシル（黒「HB」「B」）を使用しなさい。
5. 解答は答案用紙の指定された場所に記入しなさい。ただし、解答に関係のないことが書かれた答案は無効にすることがあります。
6. 問題用紙の余白と裏面は下書きに使用しても構いません。
7. 問題用紙および答案用紙はどのページも切り離してはいけません。
8. 問題用紙および答案用紙を持ち帰ってはいけません。

課題 次の文章は能の元である申楽について述べたものである。古文と現代語訳を読んで設問に答えなさい。

(第一節) 申楽、神代^{かみよ}の初まりというは、(①)、天の岩戸にこもりたまひし時、天下とこやみになりしに、八百万^{やおよろず}の神達、天香具山^{あまのかぐやま}に集まり、大神の御心をとらんとて、神楽を奏し、細男^{せいのお}をはじめたまふ。なかにも、天鈿女^{あめのうすめ}のみこすすみい出たまひて、榊^{さかさ}の枝に幣^{しで}をつけて、声をあげ、火処^{ほどろ}焼踏^{やきふ}みとどろかし、神がかりとす、うたひ舞ひかなでたまふ。その御声、ひそかに聞こえければ、大神、岩戸をすこし開きたまふ。国土また明白たり。神達の御面、白かりけり。その時の御遊び、申楽の初めと云々。くはしくは、口伝にあるべし。

(注釈) 細男：滑稽の舞

(現代語訳)

(第一節) 申楽の神代の起源を考えて見ると、(①) が天の岩戸にお隠れになった時、天下がまっ暗になってしまったので、八百万^{やおよろず}の神々が、天の香具山^{かぐやま}に集まって、大神のご機嫌を直そうと、岩戸の前で神楽を奏し、細男^{せいのお}(滑稽の舞)を演られたが、中でも天鈿女^{あめのうすめ}の命が特別に、榊^{さかさ}の枝に御幣^{ごへい}を付けたのを手に持ち、声おもしろく歌いながら、足拍子を強く踏んで踊り狂いなさると、そのたのしげな声が、岩戸の中まで聞こえたので、大神は岩戸を少しお開きになった。すると日本中がまた明るくなり、神々の顔が白くはっきり見えた。そのときの音楽舞踏が、申楽の起源だところというわけである。なお、詳しいことは、口伝にあるだろう。

(第二節) 仏在所^{ぶつざいしょ}には、須達長者^{しゅだつちやうじゃ}、祇園精舎^{ぎおんしやうじゃ}を建てて供養のとき、釈迦如来御説法ありしに、堤婆^{だいば}、一万人の外道をともしなひ、木の枝・篠の葉に幣をつけて、踊りさけめば、御供養のべがたかりしに、仏、舍利弗^{しゃりほつ}に御目を加へたまへば、佛力を受け、御後戸にて、鼓・唱歌をととのえ、阿難^{あなん}の才覚^{しやりほつ}、舍利弗の知恵、富楼那^{ふるな}の弁舌にて、六十六番のものまねをしたまへば、外道、笛、鼓の音を聞きて、後戸に集まり、これを見てしづまりぬ。そのひまに、如来、供養をのべたまえり。それより天竺^{てんじく}に②この道は初まるなり。

(注釈) 仏在所：印度、天竺：印度、ものまね：人間や動物の声や仕草、様々な音、様々な様子や状態を真似すること

(現代語訳)

(第二節) 印度では、須達長者^{しゆだつちやうじや}が祇園精舎^{ぎおんしやうじや} (寺院) を建立してその落成式の時、御釈迦様が説教をなさったところが、仏の教えをさまたげる提婆^{たいは}という者が、一万人もの異教徒をそそのかして、木の枝や笹の葉に幣を付けたのを持って、踊り叫んだので、説教することができなかつた。そこで、お釈迦様が弟子の舍利弗^{しやうりふつ}に目くばせをなされると、舍利弗に仏の力が乗り移って、後側で、楽器を鳴らし歌をうたって、阿難^{あなん}の才覚、舍利弗^{しやうりふつ}の知恵、富縵那^{ふまな}の弁説によって、六十六番の物まねをなされると、異教徒たちは、それを聞いて、そっちの方へ集まって行ってしずかになってしまった。その間にお釈迦様は説教をおすませにになった。それから印度に②この道が初まったのである。

(第三節) 日本国においては、欽明天皇御宇^{きんめいてんのうぎよう}に、大和国泊瀬^{はつせ}の河に、洪水のをりふし、河上より、一の壺^{つぼ}流れくたる。三輪^{みわ}の杉の鳥居^{うん}のほとりにて、雲各^{うん}この壺^{つぼ}をとる。なかにみどりごあり。貌^{かたち}柔和^{にゅうわ}にして玉のごとし。これ降人^{ふりびと}なるがゆゑに、内裏^{だいり}に奏聞^{そうもん}す。その夜、御門^{みかど}の夢に、みどりごのいう、われはこれ、大国秦始皇^{じちいき}の再誕^{さいたん}なり。日域^{ひこく}に機縁^{きえん}ありて、いま現在^{げんざい}すという。御門^{みかど}奇特^{きせき}におぼしめし、殿上^{てんじやう}にめさる。成人^{じんじん}にしたがいて、才知人^{さいちじん}に超え、年十五^{じふご}にて、大臣^{だいじん}の位^ゐにのぼり、③秦^{しん}の姓^{せい}をくださるる。「秦^{しん}」という文字、「はた」なるがゆゑに、秦河勝^{はたかわかつ}これなり。上宮太子^{かみつみやたいし}、天下^{てんか}すこし障^{さわ}りありし時、神代^{かみよ}・仏在所^{ぶつざいしよ}の吉例^{きちれい}にまかせて、六十六番^{むじゅうろくじゅうろく}のものまねを、かの河勝^{かみよ}におほせて、同じく六十六番^{むじゅうろくじゅうろく}の面^{めん}を御作^{ごさく}にて、すなはち河勝^{かみよ}に与へたまふ。橘^{たちばな}の内裏^{だいり}の柴炭^{ししんでん}殿^{でん}にてこれを勤^{ごん}す。天治^{てんぢ}まり国^{くに}しづかなり。上宮太子^{かみつみやたいし}・末代^{ひよみ}のため、神楽^{かみよ}なりしを神^{かみよ}という文字^{ぶんじ}の偏^{へん}を除^{のぞ}けて、旁^{はた}を残^{のこ}したまう。これ日曆^{ひよみ}の申^{まを}なるがゆゑに、申樂^{まをがく}と名^な附^つく。すなはち、樂^{がく}しみを申^{まを}すによりてなり。または、神樂^{かみよがく}を分^わくれればなり。

(注釈) 御宇：御代、みどりご：赤ん坊、雲各：殿上人、降り人：天から降りてきた人、日域：日本の異称、上宮太子：聖徳太子、日歴：こよみ、干支

(現代語訳)

(第三節) 日本^{にっぽん}の歴日^{れきじつ}がはっきりしてからのことになると、欽明天皇^{きんめいてん}時代に、大和^{やまと}の国、泊瀬^{はつせ}の河^がが洪水^{こうすい}になった時、河上^{がわがみ}から一つの壺^{つぼ}が流^{なが}れてきた。それを三輪^{みわ}の神杉^{かみよ}の鳥居^{うん}のほとりで、貴族^{きしやく}の一人^{ひとり}が拾^{ひろ}って見^みると、中^{なか}に赤坊^{あかぼう}がいた。顔^{かほ}がやさしく

美しく玉のようであった。天から降って来た人だというので朝廷に申し上げた。その夜、天皇の夢に、赤子が現れて、「自分は大国秦の始皇帝の生まれ変わりである。日本国に縁があつていま現れた」といった。天皇は奇特なことと思われて、宮中へ召された。それが成長するにつれて才智がすぐれた者になったから、十五歳で早くも大臣の位にのぼり、秦の性をたまわった。「秦」という文字は「ハタ」と読むからはたかつかつ秦河勝かみよがその人である。聖徳太子が、天下騒乱の時、神代や印度の先例に従って六十六番の物まねを河勝に命ぜられたが、先例と同じく六十六番の面をお作りになって河勝にお与えになった。橋の内裏だいら ししんでんの紫宸殿でこれをやると天下が治まり国土が安穩になった。そこで聖徳太子は、釈迦の時代からずっと下って「末代」になるからというので遠慮されて、もとは神を祭るから「神楽」であつたのを、(④)。

(世阿弥編「花伝書」、川瀬一馬：現代語訳 より引用)

設問 1. 第一節の (①) は誰のことか、正式名を書きなさい。

設問 2. 第一節についてあらすじを 100 字以内にまとめなさい。

設問 3. 第二節の下線②のこの道とは何の道か。

設問 4. 第二節についてあらすじを 100 字以内にまとめなさい。

設問 5. 第三節の下線③について、15 歳になって、秦 (はた) の姓を与えられた理由を 100 字以内で述べなさい。

設問 6. 第三節の神楽から申楽のことばが出来た所以を、現代語訳 (④) を埋めるように、100 字以内で述べなさい。